# スフィンクスと人面狛犬のユーラシアーギリシャから仙台・花巻まで（上）
# -地中海・中近東からインド・東南アジア・中国・シナ海-


| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 明治大学教養論集刊行会<br>公開日: 2023-11-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 川野,明正<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/0002000140 |

明治大学教養論集　通巻570号
（2023・9）pp. 27–57

# スフィンクスと人面狛犬のユーラシア
# ― ギリシャから仙台･花巻まで（上）
## 地中海・中近東からインド・東南アジア・中国・シナ海

川　野　明　正

## Ⅰ．はじめに

メソポタミアに紀元前 5750 年頃より起源をもつ対偶のヒョウやライオンのネコ科の霊獣像は、シルクロードを通じて東アジアに至り、その東端の日本で九世紀頃狛犬という霊獣を生み出し、1 対の「獅子・狛犬」として成立した。その中には東西通じて人面をもつものがままみられる。古今東西の人面ライオン像を通覧しつつ、人面をもつ意味について、各地域ごとに考えてみるということが、本論の意図である。スフィンクスから狛犬まで、中東からインド・東南アジア・中国・朝鮮・沖縄・日本と、狛犬や獅子像が西アジアから東アジアに至る各地に時折出現する人面獅子・人面狛犬を、まずは私の知る限り追う。なお、この論考は、明治大学大学院教養デザイン研究科特定課題講座「地域環境と人―動物人間 3 万年」での筆者の発表「スフィンクスと人面狛犬のユーラシア―ヨーロッパから花巻まで」（2023 年 1 月 20 日・於 . 明治大学和泉校舎）での発表原稿を基にしている。この演題は、講座主宰者の加藤徹教授（明治大学法学部・同大学院教養デザイン研究科）の発案で、私に発表の依頼があったもので、私自身が考えてこなかった観点、即ち人面霊獣像というユーラシアのライオン像の共通する像容の一面を主題に御提示・御提供して頂いた。この点、この場を借りて加藤徹教授に衷心より感

謝申し上げる。

## Ⅱ．中近東のスフィンクス

### 1. エジプトのスフィンクス

スフィンクス（英語：Sphinx・古典ギリシア語に由来：Σφίγξ・スピンクス）は合成獣のなかで、とくに人頭をもつもので、エジプトを起源とし、メソポタミア・小アジア（今のトルコのアジア側）・地中海海域（ギリシャ本土・キプロスなど）など、広汎にみられる。語義は「絞殺者」とされる。

エジプトでは古王国第3王朝の頃（紀元前2686年頃 - 紀元前2613年頃）から、ピラミッドが造られはじめられている。スフィンクスは第4王朝（紀元前2613年頃 - 紀元前2498年頃）の時期、ギゼーの大スフィンクスが有名だが、これは紀元前2500年ごろ、第4王朝カフラの命により、第2ピラミッドと共に作られたとされ、古いものである。王カフラのピラミッドに並んで刻まれ、王自身の像であるといわれる（図1）。エジプトではスフィンクスは、王や王妃・王の姉妹である神官の顔をもつライオン像でもある。中東では、メソポタミアのアッシュルバニパル王のライオン狩りのレリーフ（大英博物館所蔵）が示すように、王権の源泉は、ライオンを抑える能力にあり、スフィンクスは、ライオン像を王や王族の権威と合体させたものである。エジプトではこうした観念を背景とし、王をライオンと見なしたのである。第12王朝のヒクソス族のスフィンクスは、王の顔をライオン像につけた人面ライオンである。第18王朝のアメンヘテプ2世も、彼の顔を付けたスフィンクスがある（図2）。また、月本昭男氏によると、紀元前二千年紀に入ると、スフィンクスはしばしば神―たとえば太陽神―の化身としても信じられた（『日本大百科全書』〈ニッポニカ〉「スフィンクス」項）［月本HP］。

**図 1.** ギゼーの大スフィンクス
（Wikipedia 画像）

**図 2.** アメノヘテプ 2 世の
スフィンクス

## 2. メソポタミアの合成獣―グリフィンとスフィンクス

メソポタミアでは、神が天にいるという観念があり、翼をもった神像や霊獣像が造られた。また、想像上の霊獣は、グリフィンに代表されるように、ライオンと鷲などを合成した合成獣が多い。林俊雄氏の著書『グリフィンの飛翔―聖獣からみた東西交流』に詳しいが、メソポタミアから西アジア全域に拡がり、本来ライオンの棲息していなかった地中海方面からヨーロッパを経て、中央ユーラシアのオアシス地帯や中国大陸に至る。メソポタミア南部の最古の都市ウルクでは、ウルク後期のⅣ層（紀元前 3500 年頃 - 紀元前 3100 年頃）からは、最古の円筒印章と粘土板が登場し頭部がライオンで、それ以外の部分が猛禽という合成獣像がみられる［林　2006:12-13］。

グリフィンは、スフィンクスととも中東の合成獣の観念に基づく。頭がワシで、下半身がライオンで翼がある鷲頭グリフィンや、ライオンの頭で、身体に翼をもつライオン頭グリフィンなどの合成獣である。

## 3. 人頭合成獣としてのスフィンクス

メソポタミア・小アジアでは、さまざまな動物を合体させた霊獣のイメージがあり、スフィンクスはこれに人間の頭をつけたものであるともいえる。

メソポタミア・小アジアのスフィンクスは、ライオンの身体と鷲の翼を持つ怪物とされた。そのため、グリフィンに人頭を附加したかのような形象もある。たとえば、ヒッタイトの都であるメソポタミア北部、今のトルコ・イラク国境の町カルケミシュでは、前九世紀頃の、人とライオンの二つの頭をもつスフィンクス像が出土している（図3）。メソポタミアの人面獣は、翼が生えていることが多いが、古代ギリシャのスフィンクスも人面翼獣となっている。

**図3.** 人とライオンの顔もつスフィンクス。カルケミシュ出土（前九世紀）（Wikipedia 画像）

## 4. グリフィンとスフィンクスの異獣を対とする組合わせ

林俊雄氏は『グリフィンの飛翔』で「グリフィンとスフィンクス、それにナツメヤシ＝生命の木という組合せは、この頃からシリア・パレスティナ・キプロスなど、東地中海で広く登場するモチーフとなる」と指摘する［林　2006:40］（図4）。

こうした異獣を対とする組合わせは、アジアの霊獣像ではしばしば見られる。片岡元雄氏は、HP『Liondogの勉強部屋』で、中国の鎮墓獣について「日本の《狛犬》が《獅子》と《狛犬》という異なる神獣を対にしていることを想像させますし、もう一方においては、ユーラシアの西側で見られたグリフィン（獣面）とスフィ

**図4.** スフィンクス（向かって左）とグリフィン（向かって右）前十四世紀の円筒印章の印影・出土地不明［林 2006:39］

ンクス（人面）を対にした図案を思い出させます」（「中国における神獣の組合わせ方」（2007 年 9 月 27 日）と指摘する［片岡　2007］。

## 5. 中東世界のラマッス

前二千年紀中葉から前一千年紀前半にかけて、スフィンクスはパレスチナからメソポタミア・地中海海域のアナトリアまで広範に分布するが、スフィンクスはライオン門の左右にも配されている。月本昭男氏によると、スフィンクスの石像が門の両側に置かれたり（アラジャ・ホユック、ハットウシャ。前十四世紀ごろ）、建造物の一部として用いられたりされ、「これらはすべて有翼（女性？）像で、守護神（霊）的な役割を果たしていた」とされる（『日本大百科全書』〈ニッポニカ〉「スフィンクス」項）［月本　HP］。

ライオン門は、ライオンを城門や神殿の両側に配するものであるが、ライオン門の系譜に、スフィンクスの流れもある。

ニムロド（北イラク古代アッシリア遺跡）の北西宮殿の有翼人面ライオン像や有翼人面牛像（紀元前 865 年 - 紀元前 860 年・ライオンと牛の足をもち、対になる）（大英博物館所蔵）（図 5）や、ペルセポリスの万国の門（アケメネス朝クセルクセス 1 世統治期の造立・紀元前 486 年 - 紀元前 465 年）の人面牛像も、宮殿の門や城門を守る霊獣である（東門が有翼・西門が無翼）。メソポタミアでは、人面ライオンや人面牛などの合成獣を「ラマッス」と呼ぶ［三笠宮・岡田・小林・2000:223-233］。人面獣は、スフィンクスの形象とも重なり、ラマッスは有翼のものがあり、メソポタミアの合成獣の形象の代表的な霊獣であるグリフィンの形象とも重なる。アッシリアでは、モ

**図 5.** ニムロドののラマッスのレプリカ（出典 :「古代の彫像、デジタル復元されたレプリカとしてモスルに帰還」『fabcross for エンジニア』2018 年 3 月 20 日記事）

スルのラマッスが示すように初期はライオン像であった。

万国の門の人面牛像にも通じる牛の聖獣としての性格は、インドで顕著である。これは中央アジアを起源とするバラモンの宗教祭祀で、牛が犠牲獣であることに起源があるといわれる。ここでインドの人面牛像についても補足すると、インドでは人面牛スラビー（सुरभि・Surabh）がある（図6）。シヴァ神と妻パールヴァティーの乗り物（ヴァーハナ）であるナンディー（नंदी・Nandi あるいはナンディン）の母で、スラビーはカーマディーヌともいい、乳海攪拌（Ⅳ-2 にて後述）で生まれた。夫は聖仙カシュヤパである。ナンディンは白い瘤牛だが、牛頭人身の像もある。

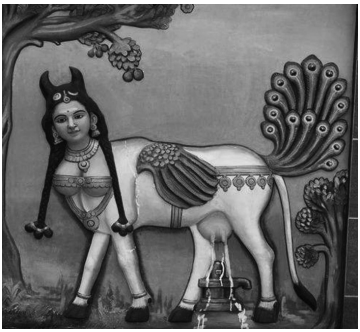


**図 6.** スラビー（マレーシア、ジョホールバル、ラジャマリアマン寺院）
（以下図版は注記以外は著者撮影）

## Ⅲ．ギリシャのスフィンクス

### 1. ギリシャ神話のスフィンクス

ギリシャ神話のスフィンクスは女性である（図7）。地中海世界のスフィンクスは女性が多い。ギリシャでのスフィンクスの概要について、『日本大百科事典』（ニッポニカ）「スフィンクス」の中務哲郎氏の解説を引用する。

**図 7.** ギリシャのスフィンクス
（Wikipedia 画像）

ギリシア神話において、スフィンクスはもっとも普通には、女の顔と獅子（しし）の身体に翼（つばさ）をもつ怪物として描かれる。古

くは子供をさらい、戦士の倒れるのを待ち受ける死霊のごときものと考えられていた。が、反面、魔除（よ）けの護符の図像ともされた。次の段階では、スフィンクスは土地の害獣とされた。系譜上ではエキドナ（蛇女）とティフォン（※川野注、巨大な蛇男）の子、あるいはキマイラとオルトス（※川野注、双頭の犬）の子とされ、兄弟であるネメアの獅子（※川野注、ヘラクレスに退治されたライオン）がネメアの地を荒らしたごとく、スフィンクスはヘラ女神（※川野注、最高位の女神）によりテバイ（テーベ）に送り込まれてその地の人々を苦しめた。これは、テバイ王家が犯した罪に対する罰であった［中務HP］。

スフィンクスは、魔除けの像で楯や墓に刻まれたが、これは死を見守る存在としてのスフィンクスの性格に連なるであろう。

スフィンクスはのちにテーベ（エジプトのナイル川東のルクソール）に関わる伝説に取り込まれ有名になる。

ソフォクレスの悲劇『オイディプス王』で知られるテーベの王オイディプスに関わる神話のスフィンクスは良く知られる（この作品にこの問答は前提とされており、場面描写はない）。

「一つの声をもち、（朝に）四つ足、（昼に）二つ足、（夜に）三つ足となるものは何か」「一方が他方を生み、生んだ女が生まれた女によって生み出されるような姉妹とは何か」「生まれ出るときもっとも大きく、盛りのとき小さく、老いてふたたび最大になるものは何か」など。スフィンクスは、人々にこれらの謎をかけては解けない者を食い殺していた。やがてオイディプスが現れて、第一の謎の答えは「人間。幼時には四つ足で這（は）い、長じては両足で歩き、老いては杖（つえ）を引くから」と解くと、スフィンクスは恥じて身を投げ、死んだ。残

りの二つの謎の答えは、昼と夜の姉妹、および影である［中務　HP］。

人頭をもつということは、知性ある霊獣であるということで、これがスフィンクスの基本的性格の１つである。そしてその知性は、人間の心に畏れとしてある死の傍らにあって、古代ギリシャ思想において神と人間の間の最大の相違である、ソクラテスも語るような「死すべき存在」としての人間の「分限」を示すのである。スフィンクスの謎かけは、ギリシャ思惟の本質に根ざす性格をもつといえる。

## Ⅳ．ヒンドゥー教のナラシンハ

### 1. ナラシンハ

ヒンドゥー教では、ヴィシュヌ神の化身ナラシンハ（人獅子）（नरसिंह・Narasimha・ナラ＝人・シンハ＝ライオン）がある。人頭ではなく、ライオンの頭の獣人の姿である。「ヌリシンハ」ともいう［立川・大村　2009］。

ナラシンハはヴィシュヌ神の10の化身のうちの４番目である。マレーシア、ジョホールバルのラジャマリアマン寺院では、寺院本堂南側壁におられ、自信ありげな顔である（図8）。化身は「アヴァターラ」という(注1)（図9）。

インドは実際にインドライオンが生息しているので、紀元前三世紀のアショカ王法勅文の柱頭にみ

**図 8.** ナラシンハ像
（マレーシア、ジョホールバル、ラジャマリアマン寺院）

**図 9.** シンガポール、スリマリアマン寺院のヴィシュヌ神のアヴァターラのレリーフ

るように、ライオン像も写実的だが、ナラシンハは、豪快な百獣の王の顔で、容貌に人間的要素も見出すことができる。

ナラシンハの神話伝承を簡潔に要約する。

> ヴィシュヌはブラフマー（ヒンディー語：ब्रह्मा・Brahmā）（＝梵天、バラモン教の宇宙原理ブラフマンに由来する神）から不死身の体を得たヒラニヤカシプ（アスラの名）を倒すため、彼の息子でヴィシュヌ信者のプラフラーダに、夕方に門までヒラニヤカシプを誘い出してもらい、ヒラニヤカシプが割った柱の中からライオンの頭をした人間の姿のナラシンハに化身して飛び出し、彼の膝の上で、ヒラニヤカシプの体を素手で裂いて殺した。

ヒンドゥー教のヴィシュヌ派では、悪が栄えた時に神が特別な姿をとるという考えがあり、人間の姿もそこに含まれる。

人獅子であるナラシンハは、ヴシュヌ神のアヴァターラとしての性格に根ざすものである。ヴィシュヌ神は、ヒンドゥー教の成立・発展の過程で各地の神々を化身として取り込み、主神の一つとなった。ナラシンハ自体はインドに生息するインドライオンへの土着信仰に由来する。世界が危機に陥った際、ヴィシュヌは化身の姿をすることによって世に現れ、力を発揮する。その力のありかたとして動物の獣性を源泉とする力を取り入れるといえる。

## 2. カンボジアのアンコール遺跡バンデアイスレイのナラシンハ

アンコール遺跡のバンテアイスレイ（Banteay Srei・創建年代 967 年・ヒンドゥー教シヴァ派）の参道上の北門上に、ナラシンハに化したヴィシュヌ神が、アスラ（阿修羅）を組み敷く、乳海攪拌神話の結末場面のレリーフがある[注2]（図 10）。

ヒンドゥー教でミルクは重要である。たとえば、ラオス南部チャンパー

サック県のメコン川西岸にあるワットプー（Wat Phu）は、聖なる山リンガバータ（リンガの山）の麓にあるヒンドゥー教の寺院である。

神殿に安置されているリンガは陽具形で、シヴァ神を象徴する。ヨニは陰具形、両者が合わさる。ここにミルクを掛けるが、ミルクは生命の精であって、盆地の穀物の繁殖を促す。山の麓の参道両脇には貯水池がある。

**図 10**. バンテアイスレイの
アスラを組み敷くナラシンハ

## Ⅴ．上座部仏教の人面獅子

### 1. ミャンマーのライオン像チンテ

ミャンマーでは、ライオンを「チンテ」（ခြင်္သေ့・Chinthe・チンシーとも）という。シンハに連なる言葉である。仏塔の四隅にはチンテが護り、ミャンマーの代表的な護法獅子である（図 11）。ミャンマーの国章は、2 頭のチンテが外を向いて国土を護る。

護法獅子となるチンテは伝説があるが、登場する王子はライオンと人間の異類婚姻の結果生まれたとされる。

**図 11**. チンテ
（ヤンゴン、シュエタゴンパヤー）

昔、一人の王女がライオンと結婚し、息子をもうけた。その後、王女が離縁したので、ライオンは怒り狂い、いたるところで人民を食い殺した。王子は、横暴なライオンを退治してきたと母親に報告した。そこで父親殺しを知らされた王子は、罪を悔いライオン像を造らせ全

国の僧院の入口に奉納したという［東西南北研究所　2015］。

敢えて言えば、王子はライオンと人間の子供であるから、動物人間的な要素もみられるといえないこともないだろう。

## 2. ミャンマーの人獅子マヌシーハ

人獅子は、上座部仏教の世界ではままみられ、それらしき像が十四 - 十五世紀頃には出現しているようだ。ミャンマーでは、人面獅子「マヌシーハー」（ဓနုဿီဟ·Manussīha）がいる。「シーハー」は「シンハ」に由来する。ミャンマー中部のマンダレーでは「マノッティハー」と呼ぶ。ミャンマーではライオンはチンテ・チンシーと呼ばれるが、それと同系統の言葉である。「マノ」はインドのヒンドゥー教の「人獅子」こと「ナラシンハ」の「ナラ」と同じ、「人」の意味であるが、正反対に人面獅身である。表情が穏やかである。

マヌシーハの配置場所は、寺院の正殿の四隅の柱頭・仏塔の四隅・門楼の上部左右・門前の神魚マカラ（ミャンマーではマガー・ギリシャ由来の神獣で、元来は山羊の上半身と魚の下半身。インドなどでは神魚）のアゴの下・鐘のつけ根部分などで、至る所におられる。

マヌシーハは、仏教の守護獣である。伝説では、海から来る羅刹（ラクシャサ・サンスクリット語 : राक्षस・Rākṣasa· 鬼神の総称）から、スワンナプーム（サンスクリット語 : सुवर्णभूमि・Suvarṇabhūmi・「黄金の土地」を意味する港）の王室の赤子を護るために僧が造り出した守護獣であるという。1000体の人面獅子を造り出し、羅刹を囲んで打ち破ったという。

マヌシーハは、仏塔四隅の守護獣でもあり、その際首から下が二重の身体をもつのは、仏塔守護神のチンテと同じ造形である。チンテは雄獅子であり、牝獅子はなく、男性器を２本有する場合もある。これは左右方向どちらでも獅子の形態に見えることを考慮して角隅に配置する動物像を造形したも

のである。仏塔は仏陀そのものだから、護法獅子は４体１組である。２体１組の対偶原理ではない。尊仏を守護する獅子座の対偶ではないありかたを示している。

仏塔守護獣の形態に由来するものとして、後足を４本足とする造形もある（カチン州ミッソンの仏塔の入口を守るマヌシーハは後足を４本としている）（図 12･13）。

**図 12.** マヌシーハ（尊仏からみて左獅・カチン州ミッソン）

**図 13.** マヌシーハ（尊仏からみて右獅・カチン州ミッソン）

1784 年以来の歴史があるマンダレーのマハムニパヤー（Maha Muni Paya）では仏塔の四隅・鐘の龍頭上・鐘柱の柱頭上に人面獅子が居た（図 14）。

人面獅子は、門前の一対のマカラ頭の下で、魚頭を支えているものも多く、マンダレーはアトゥマシー僧院門前のマカラと人面獅子などがそれである。

これらは元はガンダーラにもあるアトラースに連なる「支える者」の範疇に入るだろう。これはマンダレーではアトゥマシー僧院門前のマカラと人面獅子がある（図 15）。

**図 14.** マハムニパヤーの鐘柱柱頭上のマヌシーハ（マンダレー）

**図 15.** アトゥマシー僧院門前のマヌシーハとマカラ(マンダレー)

### 3. タイ王国のノーラスィン―ムグダハンのワットシーモンコルタイの人面獅子像（タイ王国ムクダハン県ムアンムグダハン郡）

タイ及びラオスでは、人面ライオンを「ノーラスィン」（Norasingh）という。これも「人獅子」を意味する。タイ東北部イサーン地方のメコン川西岸の街・ムグダハンは、対岸のラオス側のサワンナケートとを結ぶ国際埠頭で、ヴェトナムとタイをラオスを夾んで結ぶ東西回廊の要衝である。

その渡し船乗り場斜め向かいにあるワットシーモンコルタイ（Wat Si Mongkol Tai）では、お堂の前を象像（ぞうぞう）と人面獅子像が組になって守る。人面獅子は、怪体（けったい）を極めるが、どうも年代は古くはないようだ（図 16）。

**図 16.** ワットシーモンコルタイの人面獅子像（その 1）（ムグダハン）

組になる人面獅子像は、顔も人間かどうかわからないグロテスクな雰囲気である。ケンタウロスのような4本足の上に、胸を張る。肩はあるのに腕はなく、背後から人面のようなものが抱きつき、脚が伸びるかにみえる。

前面に武者らしい者がいて、その両脇はトガゲが這い上がる。台座には二種類の全く表情の違う猿頭があり、一匹は知的に表情で、もう一匹はひょうきんな表情だが、ともに生首である。

堂宇の入り口左右には、さらに覆面のような顔面の人面獅子がいる。こちらも小柄ながら強そうだ（図17･18）。

**図17.** ワットシーモンコルタイの人面獅子像(その2)(左獅)（ムグダハン）

**図18.** ワットシーモンコルタイの人面獅子像(その2)(右獅)（ムグダハン）

## Ⅵ. 中国の人面獅子像

### 1. 中国の鎮墓獣―人面獣の典型例

中国に人面獅子は意外に多くはない。しかしシナ海域や西南地方・西北地

方に人面獅子像をみることができる。また、獅子像ではないが、獅子像に影響を与えたと思われる靈獣に鎮墓獣がある。墓所と埋葬者を護る鎮墓獣は、南北朝期（439-589）の北朝で、北魏（386-557）前期の五世紀後半から人面獣と獣面獣の２種がある。人面獣は知性ある靈獣であるから、咆哮する獣口である必要はなく、知性をもつ者にふさわしく、思慮を表現する造形で、閉口で造られ、獣面獣は魔除けの必要から咆吼して開口で造られる。この組み合わせは唐代の鎮墓獣にも継承され、唐三彩の陶製鎮墓獣が盛んに制作される。靈獣に知性を求めると人面となる必然性がある。

北魏の洛陽遷都以前の都平城（398-484・現在の大同市）では、平城型鎮墓獣というべき類型の陶造鎮墓獣があり、この種の鎮墓獣は出土文物に以下のものがある。宋紹祖墓（太和元年・477）鎮墓獣＝獣面獣１体・賈宝墓（太和元年・477）鎮墓獣＝獣面獣１体（木造）・司馬金龍墓（太和八年・484）鎮墓獣＝人面獣１体・大同雲波路 M10 墓（年代不詳）鎮墓獣＝人面獣・獣面獣各１体・雁北師院２号墓（年代不詳）鎮墓獣＝人面獣・獣面獣各１体である。

雁北師院２号墓の鎮墓獣は陶製で、人面獣は身体が馬に似る（図 19）。獣

**図 19**. 雁北師院２号墓鎮墓獣
（人面獣）（H:33.9･L:40･W: 未載）
［劉 俊喜 2008: 彩版一七］（以下、単位㎝）

**図 20**. 雁北師院２号墓鎮墓獣
（獣面獣）（H:31.2･L:40･W: 未載）
［劉 俊喜 2008: 彩版一七］

面獣は、虎形である（図 20）。獣口の開閉は、人面＝閉口・獣面＝開口である。人面獣は額部に髻（もとどり）状の角がある［劉　俊喜　2008:131-132］。角があるユニコーン状の馬像が、後漢の時代には中国北方から西域にかけての鎮墓獣であったが、その名残を覗わせる。なお、平城型の鎮墓獣は、発掘状況からみて、人面獣と獣面獣は別個に設置し、対偶に設置するものではなかったが、鎮墓獣に開口・閉口の 2 種があることは、獅子像の開口・閉口にも影響を与えた可能性も考慮される。

太和十七年の 493 年に北魏は孝文帝（467-499・在位：471-499）によって、平城から洛陽に遷都するが、洛陽で出土した元邵墓（げんしょう・孝文帝の孫・487-520）の鎮墓獣があり、これが人面・獣面一対で開口・閉口の違いが確認できる（図 21・22）。

**図 21**. 元邵墓鎮墓獣（人面獣）
（総高 :25.5）［胡 明蘭・洛陽博物館 1973: 圖版拾弐］

**図 22**. 元邵墓鎮墓獣（獣面獣）
（総高 :25.5）［胡 明蘭・洛陽博物館 1973: 圖版拾弐］

## 2. 黄土高原の「胡人面型炕頭獅」（陝西省北部）

中国陝西省黄土高原には、単体の小型の石獅（＝石獅子）があり、「炕頭獅」（漢語：Kangtoushi・カントゥシー・こうとうし）と呼ぶ。炕とは朝鮮半島のオンドルにも近い寝台暖房のことである。ただ、寝台は高いので、幼児が落下してしまう危険がある。これを防ぐために、小型の石獅子を寝台の上に置いて、帯で幼児の腰を縛って重しとするのである。つまり、炕頭獅は「子守り獅子」なのである。

炕頭獅は黄土高原に豊富な砂岩で彫られ、制作時間も数時間である。様々なユニークな造形があるが、そのなかに胡人の容貌をもつものがある。

かつて唐代の都長安は、シルクロード交易の繁栄で、胡人たちも多く往来して栄えた。胡人とは、イラン系のソクド人などのシルクロード上の民のことである。

炕頭獅には胡人面型炕頭獅ともいうべき造形がある（図 23）。胡人顔の獅子像が制作される背景として考えられることは、「獅子」という単語はサンスクリットのシンハの音に由来し、前漢代にシルクロードを通じて中国に入ったもので、獅子と胡人はもともと相性が良いという点である。なお、折曉軍氏は『陝北民俗小石獅』で、この種の顔相を「羌胡風貌」と呼んでいる［折　曉軍　2008:81-88］。

獅子と胡人の組み合わせは、唐朝の文化的影響も深く受けた統一新羅時代の隅柱石に一面に胡人を、一面に獅子を彫ったものなどにもみられる。

**図 23.** 胡人面型炕頭獅

中国西北地方で魔除けの役割をもつ石獅に、胡人の形象が投影されたり、あるいは馬を繋ぐ石柱柱頭上の獅子像に胡人が跨がった

りする理由の１つに、胡人の異人としての特異性があると考えられる。中国では外来の異人が、自分たちにはわからない地元の事物の価値を見出して、宝物を奪う物語があり、これを「胡人識〈採〉宝譚」という（澤田瑞穂〈著〉『金牛の鎖― 中国財宝譚』に詳しい）［澤田　1983］。たとえば、地元民には何の変哲もない石だと思ったものが、水が湧く石で、胡人が持ち去って初めて知ったなどの伝承である。そうした異人の異能性の観念を背景にみることもできるかもしれない。

### 3. 雲南の宿場町弥祉鎮の鎮水の石麒麟と人面龍王像（雲南省大理白族自治州弥渡県弥祉鎮）

雲南茶馬古道の古い宿場町弥祉は、漢族が多い町で、郊外はペー族（漢字表記：白族・チベットビルマ語群イ語系）が多い。私の中国の家のある雲南省西部の大理古城から、東南に１時間半ほどの道のりである。石畳の街道がＳ字に続き、その左右を往年の「馬店」（漢語：Madian・マーディエン・ばてん・キャラバン宿）が続く。

静かな渓流に石麒麟が石橋の上にぽつんと立つ。

これは渓流の水を鎮めるための石麒麟である（図 24）。中国で水を鎮める霊獣像は、石橋にいる。四川省楽山の大仏や重慶市大足の寝釈迦仏も、鎮水の石仏といえる。

**図 24**. 弥祉鎮鳳凰橋石麒麟（H:120･L:77･W:50）

弥祉の石麒麟は、顔が少しいびつな感じて麒麟には見えないが、頭の上に一本だけ角がある。一般の麒麟も二本の角をもつが、この石麒麟も有角獣ではある。ただ、地元の人はこれを石獅だという人も多い。「四不像」とも呼ばれる。

しかし伝説があり、河に石橋を造る際、河

を氾濫させる「母猪龍」（漢語：Muzhulong・ムーチューロン・雌豚の龍）が、さんざん石工の造る石橋を洪水で押し流すので、石工が発憤して、いのちのこもった石麒麟を彫りあげ、母猪龍を退治したという［鄧　鳳・李　永群 2010:26-29］。

それゆえ、霊験のある石麒麟とされる。

ただ、昼間は子どもの遊び相手になってあげているのだ。

石橋は鳳凰橋といい、橋のたもとの楼閣は、財神閣という。近くに気泡を水中に生じる珍珠泉（しんじゅのいずみ）という井戸があり、人面の龍王像が井戸の守り神として祀られる（図 25）。のどかな宿場街ののどかな石麒麟と人面龍王、いずれも漢族らしからぬ、どこかプリミティブでエスニックな雰囲気もある。

**図 25**. 弥祉鎮珍珠井人面龍王像
（写真は旧像、2023 年 8 月訪問時は
新しい龍王像に置き換えられていた）

### 4. 澎湖諸島漁翁島二坎村二興宮の人面石獅（台湾澎湖県西嶼郷二坎村）

澎湖群島は漁翁島に伝統的な街並を残す。二坎村には、二興宮という廟があり、祭神は邱王爺である。

石獅は人間のような鼻と張り出した頬が人面獅子の印象を与える（図 26・

27）。日本の狛犬同様の左獅＝開口・右獅＝閉口の区別がある。粗さもあり素朴ではあるが、老成した智恵を具えた獅子という雰囲気である。

**図 26.** 澎湖諸島漁翁島二坎村二興宮人面石獅（右獅）（H:37.5･L:37.5･W:27）

**図 27.** 澎湖諸島漁翁島二坎村二興宮人面石獅（左獅）（H:34･L:39･W:23）

## Ⅶ. 朝鮮半島の人面獣

### 1. 高輪承教寺の人面獣（東京都港区高輪）

朝鮮系の獅子像に人面獅子は管見に見当たらないが、人面獣が朝鮮半島にないわけではない。管見に作例が１つある。高輪承教寺の山門前にある動物像は、花崗岩製の人面獣である（図 28・29）。日本の霊獣「件」（くだん）に近い人面牛を想起させるが、エキゾチックな人面は、朝鮮半島の作風であるはずである。昭和七年（1932）一月に上大崎の田中義次が奉納した。

関勝宣御住職によれば、この人物は大陸から帰国して、この石像を持ち帰ったが、良くないことが起き、この石像を寺に奉納した。

この動物像は、尾は牛ではなく馬に近く、蹄が牛か鹿か馬か羊に似る蹄のある動物で、胴体は牛とは限らない。顔は髭を生やした人面で、西域風といった面立ちである。前足・後足に反り立つ見事な羽毛の彫刻があり、背中に毛並が連続し、獅子にも近い。

**図 28.** 承教寺人面獣（左獣）
（H:65･L:120･W:29）

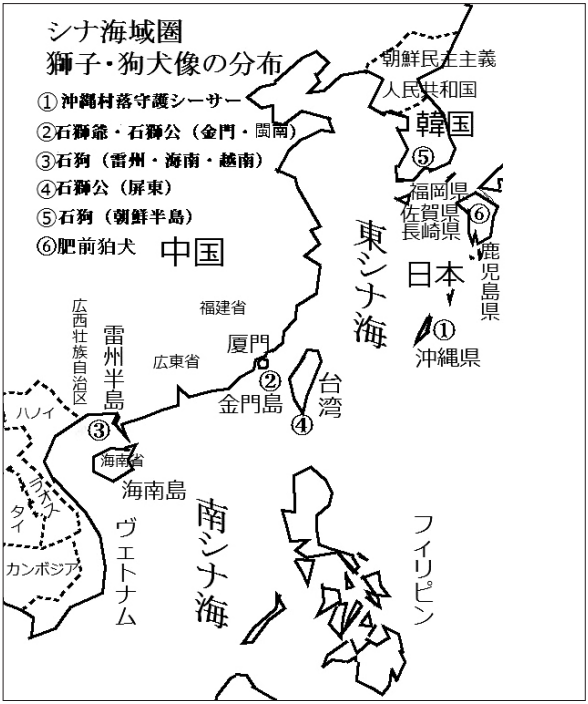
**図 29.** 承教寺人面獣（右獣）
（H:62･L:124･W:30）

## Ⅷ. シナ海域の風水説系人面獅子・狗犬像

### 1. シナ海域の獅子・狗犬像の２大特徴

シナ海域には、多くの獅子像と「狗」の名のつく狗犬（くけん・和語では「犬狗」〈けんく〉というが、漢語語彙に合わせる）像がある。これらの霊獣の多くには、「向天眼系霊獣像」（こうてんがんけいれいじゅうぞう）と呼ぶことのできる形態的特徴があるが、いずれも風水説を原理として造立されるという共通性がある。この系統の霊獣像は、南シナ海北部湾岸に、広東省西部・広西壮族自治区・海南島・ヴェトナム北部に跨がって、「石狗」（雷州方言・海南方言：Qiugau・チィウガウ・せきく / ヴェトナム語：Chó dá・漢字表記:「狗石」）があり、福建省南部に相当する閩南地方に「石獅公」（閩南方言：Qiusaigung・チィウサイクン・せきしこう）・「石獅爺」（閩南方言：Qiusaiya・チィウサイヤー・せきしや）があり、台湾南部の客家系集落に「石獅公」（閩南方言：Qiusaigung・チィウサイクン・せきしこう）があり、朝鮮半島に「石狗」（석구・SeokGu・ソック・せきく）があり、沖縄に村落守護シーサーがある（地図）。なお、九州北部の肥前狛犬も向天眼系霊獣像の一種といえるが、風水説との関係はない。

そして、以上の２大特徴の他、人面型の獅子・狗犬像もみられることも特徴として挙げることができる（韓国の石狗を除く）。




**地図**. シナ海域圏獅子・狗犬像の分布

## 2. 雷州半島の人面石狗（広東省雷州市・湛江市・徐聞県等）

石狗の初出は推測困難ではあるものの、海南島に明代中期の著名な官僚である海瑞（1514-1587）の墓所がある。この石獣が参考になる。墓前の墓道の石獅・石虎は、石狗に類する特徴をもち、他地の石獅・石虎とは異なる形態であり、十六世紀後半には出現したと考えられる。

雷州半島では、石狗は、単体で設置される場合と２体１対で設置される場合に分かれる。設置場所は、単体では村口・水口（村落に河川が流れ込む場

所）・水辺・山腹・巷口（路地の入り口）、個人宅にもみられ、門口・屋根上・壁面などに設置される。川や海を鎮めるために設置されることもある。廟堂や楼閣に置かれる場合や墓地に置かれる場合は、2体1組の設置が多い。

石狗は形態上の類型分類上、私なりの類別では、a. 向天眼型・b. 狗犬型・c. 石獅型A（蹲踞型）・d. 石獅型B（頭部側視型）・e. 人面型・f. 石枕型・g. 丸顔丸眼型・h. 球頭角身型・i. 無頭型・j. 石敢當型・k. 屋頂型・l. 壁龕型がある。このうちk. 屋頂型・l. 壁龕型は、設置場所からみた分類でもあるが、小型である特徴から形態上の類型としても適用しうるであろう。

雷州半島にはe. 人面型の類型に挙げる人面状の石狗が多く（図30）、特に頬の隆起が、人面の印象を与える。f. 石枕型にも人面状の石獅は多く（図31）、c. 石獅型A（蹲踞型）やg. 丸顔丸眼型にも多い。

**図 30.** 人面型石狗（雷州博物館所蔵）（H:68･L:56･W:28）

**図 31.** 人面状石枕型石狗（雷州博物館所蔵）（法量未記載）

### 3. 福建南部烈嶼の人形石獅爺（台湾金門県烈嶼郷）

金門島に隣接する小金門島こと、烈嶼郷の烈嶼文化館に、人像状の石像がある（図32）。身体は直立し、頭部も丸く、人面そのものである。唯一獅子らしい点は、中国で虎や獅子の額に書かれる「王」の字であり、「百獣の王」を意味する。しかし王紋があご下にある点が異様である。

現地ではこの石像は「石敢當」であるとも聞く。石敢當は直進する気が悪

気であるので、それを跳ね返すために立てられる。風水説上の原理で立てる獅子と石敢當は相性が良いので、そう呼ばれるのかもしれない。ただ、胸部は磨耗しており、「石敢當」の文字は読み取れない。

**図 32.** 金門県烈嶼郷人面型石獅爺
（烈嶼郷土資料館所蔵）
（法量未記載）

### 4. 台湾南部の巨大人面石獅公（台湾屏東県高樹郷廣福村）

巨大な「石獅公」（閩南方言:Qiusaigung・チィウサイクン・せきしこう）が 4 体も居る村が台湾最南端の県、屏東県にある。廣福村は、広東系住民（いわゆる「客家」・客属系）の村である。乾隆二年（1737）に立村し、旧大路関とも呼ぶ。隣村の廣興村は新大路関と呼ぶ。咸豊七年（1857）の山崩れで、移動した村が廣興村である。

石獅を立てる理由は、東南側からの山谷から吹く強風を防ぐためである。したがって、この村の 4 体の石獅は現在はすべて東南方向（110 度前後）を向く。

石獅公の創建年代について、陳永茂「大路關石獅」によると、初代石獅子は、乾隆四十二年（1777）に造立された。咸豊七年（1857）の土石流で埋まり、1984 年に掘り出されて再設置された（図 33）。二代目は大正七年（1918）に建てられ、三代目は 1965 年に建てられている（図 34）［陳永茂 HP］。この他個人宅に 4 体目の石獅公がある。いずれも人面状の表情で、朗らかな雰囲気である。十八世紀後半に人面に近い表情の石獅子が制作されていたことは興味深い。

**図 33.** 初代石獅公
（H:304･L: 約 315･W: 未載）

**図 34.** 第三代石獅公
（H:293･L:380･W: 未載）

## 5. 沖縄県東風平集落の 4 体の石獅子（八重瀬町東風平）

沖縄の村落守護シーサーにも幾つか人面状の獅子像がある。村落守護シーサーの役割は基本的には「風気返し」（フーチーゲーシ）、つまり村に侵入する悪いもの、悪霊・疾病を跳ね返すもので、長嶺操氏によると、沖縄の言葉

でいうと「ムンヌキムン」（魔除け）の役割で立てる［長嶺　1982:112］。

その役割は、上述の悪霊＝マジムン（魔物）・ヤナムン（魔物に相当する）や悪気など、良くないものの侵入の防護であるといえ、「ヤナムン返し」（ヤナムンゲーシ）と呼ばれることが多い。伝染病からの防御の場合、伊平屋島では、「悪風返し」（アクフウゲーシ）ともいう。また、村落守護シーサーには、それとともに重要な役割があり、それは「火返し」（ヒーゲーシ）である。

村落守護シーサーは、最古のものは、八重瀬町富盛の石彫大獅子（尚貞王二十一年・1689）であるが、その役割は火返しにある。

旧東風平（こちんだ）の石獅子は、隣接する志多伯（したはく・合計５体）、あるいは宜次（ぎし）、新城（あらぐすく・旧時４体、現在２箇所２体）とともに、村の４箇所に石獅子が置かれる。

子ヌ方（＝北）のシーサーは、丘の上に設置され、「へ」の字形の胴体で、首がない様子の人面獅子で、迫力がある。約 20m 離れて「ガン屋」（ガン＝龕。御遺体を墓所まで運ぶための喪輿〈そうよ〉の類であるが、それを収める小屋）があり、明らかに魔除けの意味がある。村の内向きを向く（図 35）。

卯ヌ方（＝東）のシーサーは、東風平中学校の向かいの町営住宅裏手の高台にある。への字型に、丁寧に前足、後足を揃え、舌をみせる人面獅子である。北と東の石獅子は形態が共通している。

**図 35.** 東風平子ヌ方のシーサー
（H:62･L:96･W:26）

西ヌ方（＝西）のシーサーは、かつての馬場の近くにある。しゃがんで目を見開き、口も開けている様子である。

午ヌ方（＝南）の石獅子は、戦後再建された獅子像で、セメント製で

ある（図 36）。人面状の容貌は継承されており、顎がしゃくれている。

### 6. 新城集落の石枕のような村落守護シーサー（八重瀬町新城）

新城（あらぐすく）には、以前 4 体の獅子がいたが、現在は東のシーサーと西のシーサーの 2 体である（図 37）。いずれも、造立年代は不明であるものの、石枕のような姿で、同一人物の製作だろう。丸い目に、大きな鼻、一文字の口の人面獅子である。この石枕状の胴長かつ丸顔の石獅は、広東省西部の雷州半島の石狗に同様のタイプがある。

**図 36**. 東風平午ヌ方のシーサー
（H:44･L:54･W:37）

**図 37**. 新城西のシーサー
（H:62･L:96･W:26）

### 7. 宜野座村惣慶集落の「石敢當」（宜野座村惣慶集落）

宜野座村南部の惣慶（そけい）集落は、村落シーサーが村の三方、北・東・西を護る。シーサーは、村に侵入する魔物を村の境界で護り、魔除けの石敢當（いしがんとう）と同様の魔除けの役割で、この集落では「石敢當」とも呼ばれる。

足のない人面獅子で、人面魚のような雰囲気があり、珍しい形態である

（図 38）。松田集落と宜野座集落にも足のない胴長の石獅子があったが、宜野座集落の 1 体は遺失し、石獅子は現存しない。松田集落はかつて 4 体の石獅子があったといい、現在西の石敢當の 1 体のみが残るが人面状ではない。

## 8. 沖縄市古謝集落のシーサー

沖縄市の古謝（こじゃ）集落はこれまで村落守護シーサーが 3 体造立されている。1 つは東（アガリ）のシーサー（図 39）、1 つは北（ニシ）のシーサーと、アメリカ軍のトラックがぶつかって壊れて撤去された西（イリ）のシーサーである。

東のシーサーはユニークで、手を広げて立ち、いかにも魔物を通さないという力強い姿である。二足立ちの村落守護シーサーは唯一無二である。

屋号でイリナカジョー（西中門）と呼ばれている屋敷地内に位置する。公民館前の道路の拡張工事に伴い 1995 年 6 月 26 日に移動され、現在の場所に南の方角の津堅ドゥー（津堅島と勝連半島との海峡）へ向けて設置された。戦前は、石獅子の後ろ側にクムイ（溜池）があった。クムイは火返しの意味があり、それで「火返し」の意味もあると伝えられる。

（続篇 :「スフィンクスと人面狛犬のユーラシア―ヨーロッパから仙台･花巻まで（下）日本の人面型狛犬」に続く）

**図 38**. 惣慶西の石敢當
（H:37･L:75･W:34）

**図 39**. 古謝東のシーサー
（H:74･L:55･W:64）

## 注

注 1. ヴィシュヌ神のアヴァターラは以下の 10 位である。マツヤ〈魚〉・クールマ（亀）・ヴァラーハ（猪）・ナラシンハ（人獅子）・ヴァーマナ（矮人）・パラシュラーマ（斧を持ったラーマ）・ラーマ（シュリ・ラマチャンドラ、アヨーディヤーの王）・ブッダ（あるいはバララーマ、またはリシャバ〈ジャイナ教の始祖の一人〉・クリシュナ（闇または黒）・カルキ（翼の生えた白馬とともに現れる最後のアヴァターラ）。

注 2. 乳海攪拌神話の概要

偉大なリシ（賢者）ドゥルヴァーサスの呪いを受けて対抗できない神々に代わり、天海に侵攻したアスラ（阿修羅）に対抗するため、ヴィシュヌは、不老不死の霊薬「アムリタ」を造ろうとし、乳海攪拌を行うが、これにはアスラの力も必要であった。アスラは神々とアムリタを分け合うことで和睦した。乳海の攪拌は一千年続き、太陽・月など、様々なものが生じた。最後に天界の医神ダヌヴァンタリが、アムリタの入った壺を持って現れた。

アムリタを手に入れたアスラは、ヴィシュヌが化身した美女に心を奪われて、アムリタを渡してしまう。アスラと神々は尚戦うが、最後はヴィシュヌと神々が勝利する。

## 参考文献

［スフィンクス］

三笠宮　崇仁（監修）、岡田　明子・小林　登志子（著）2000『古代メソポタミアの神々―世界最古の「王と神の饗宴」』東京・集英社

片岡　元雄（著）2007 ＨＰ『Liondog の勉強部屋』「中国における神獣の組合わせ方」2007 年 9 月 27 日 http://benkyobeya.cocolog-nifty.com/blog/cat13338504/index.（2023 年 6 月 25 日閲覧）

林　俊雄（著）2006『グリフィンの飛翔―聖獣からみた東西交流』平凡社

miriyun（著）ＨＰ「その後のスフィンクス―ライオン紀行（7）」『写真でイスラーム』http://mphot.exblog.jp/tags/%E2%98%85%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%82%AA%E3%83%B3%E7%B4%80%E8%A1%8C/3/（2023 年 6 月 25 日閲覧）

月本　昭男（項目執筆）ＨＰ「スフィンクス」『大日本百科事典』（ニッポニカ）https://kotobank.jp/word/%E3%82%B9%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%AF%E3%82%B9-84703（2023 年 6 月 25 日閲覧）

中務　哲郎（項目執筆）ＨＰ「スフィンクス」「神話」項『大日本百科事典』（ニッポニカ）

https://kotobank.jp/word/%E3%82%B9%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%AF%E3%82%B9-84703（2023 年 6 月 25 日閲覧）
著者不明（記事）2018 ＨＰ「古代の彫像、デジタル復元されたレプリカとしてモスルに帰還」『fabcross for エンジニア』2018 年 3 月 20 日記事 https://engineer.fabcross.jp/archeive/180312_winged-lions.html（2023 年 6 月 25 日閲覧）（図 5. 出典）

［ヒンドゥー教のナラシンハ］
立川武蔵（著）・大村次郷（写真）2009『聖なる幻獣』東京・集英社

［上座部仏教の人面獅子］
東西南北研究所（編集）2015 ＨＰ『ミャンマーで今、何が？』Vol.127.2015.01.07 http://www.fis-net.co.jp/Myanmar（2023 年 6 月 25 日閲覧）

［鎮墓獣］
黄　明蘭・洛陽博物館（著）1973「洛陽北魏元邵墓」『考古』1973 年第 4 期 :218-224 頁
劉　俊喜（編）2008『大同雁北師院北魏墓群』北京・文物出版社

［炕頭獅］
澤田　瑞穂〈著〉1983『金牛の鎖― 中国財宝譚』東京・平凡社
折　曉軍（著）2008『陝北民俗小石獅』北京・北京工芸美術出版社

［雲南省密祉鎮人面麒麟］
鄧　鳳・李　永群（著）2010『東方小夜曲《小河淌水》的故郷』昆明・雲南美術出版社

［シナ海の人面獅子］
川野　明正（著）2021「沖縄村落守護シーサーの類型分類と地域分布 - シナ海石造獅子・狗犬文化圏の比較研究（4）」『明治大学教養論集』№ 552: 61-88 頁
川野　明正（著）2022「シナ海石造獅子・狗犬文化圏からみた沖縄村落守護シーサー ―シナ海石造獅子・狗犬文化圏の比較研究（7）」『明治大学教養論集』№ 564:43-86 頁
陳　磅礴（著）2013『臺灣石獅圖録』台北・猫頭鷹出版
陳　永茂 HP「大路關石獅公」『台湾客庄文化数位典蔵網站』、中華民国客家委員会 https://hch.hakka.gov.tw/searchs.asp?smode=2#（2023 年 6 月 29 日閲覧）
陳　永生（主編）2012『雷州石狗』広州・嶺南美術出版社
長嶺　操（著）1982『写真集沖縄の魔除け獅子』具志頭・沖縄村落史研究所

若山　恵里（著）2022『石獅子探訪記―見たい、聞きたい、探したい！沖縄の村落獅子たち』那覇・ボーダーインク

（かわの・あきまさ　法学部専任教授）